

油彩

(テンペラ併用)

ガラスの静物を描く①

三浦明範の静物画講座

みうらあきのり 1953秋田 東京学芸大学卒 文化庁主催現代美術展、セントラル美術館
油絵大賞展、昭和会展、安井賞展、具象絵画展「エナジー」、日本の絵画新世代展、両洋の眼・現
代の絵画展 21世紀の旗手展などに出品 文化庁芸術家在外研修員としてベルギーに滞在(96
~97) 春陽会委員



(図1) 参考作品 三浦明範「休日の朝」S 80号
透過する光に惹かれ、下着やストッキングの薄い布をモチーフにしたもの。

■絵を描くことについて④

今回も引き続き、「絵を描く」ということについて考えていきますが、前回は発見することの重要性を書きました。では、このような発見はどうしたらできるのでしょうか。もちろん、このような方法論などありえないのですが、いくつかのヒントを挙げてみたいと思います。

■知るということ

人類は、未知の物に対して食欲に「知る」ことをしてきました。遠くは宇宙の果てまで、近くは、物質を構成する最小単位の素粒子にまでその知識欲の触手を伸ばし、すべてのものに名前を付けていきました。そして今、私たちはそれらを「知っています」。

しかし、本当に知っているのでしょうか。知ったつもりになっている

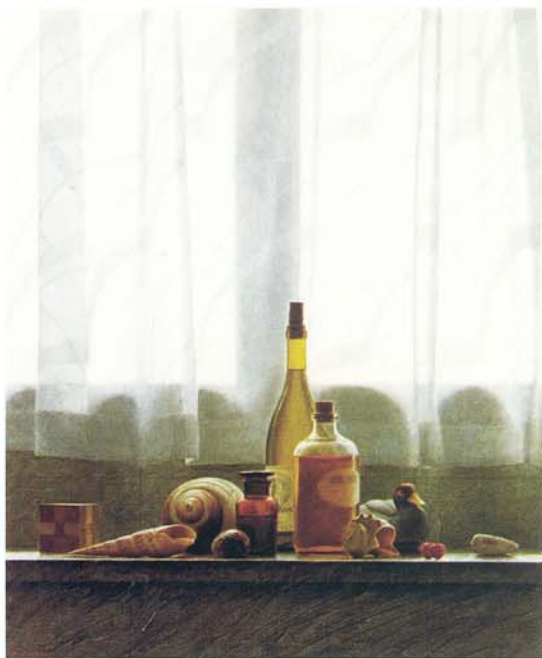
だけなのではないでしょうか。

たとえば、私達が野山を歩いていて、鳥の鳴き声が聞こえたとき、もしそれが、「知って」いる鳥なら、「ホトトギスだ！」などとやって、姿が見えなくてもその鳥のイメージを作り上げてしまいます。しかし、それはあくまで概念としてのホトトギスであり、あたかも個体としての鳥を見た(知っている)かのような錯覚をしているだけなのです。

すなわち、私たちはあらゆるものに名前を付けてきましたが、「名前をつけた」ことが「知った」と同義語になってしまっているのです。そのため、名前を言うことができれば、知っていることとして満足してしまいます。日常のシーンでも、よく経験しますね。例えば井戸端会議で、タレントの名前がなかなか出てこないでイライラしていて、フツと思ひ出したりすると、あたかもすべ



(図3) 参考作品 三浦明範「STRIPE MORNING」F 15号
同じく、ブラインド越しの光と影をモチーフに。



(図2) 参考作品 三浦明範「壺と貝殻」F 20号
同じく、カーテンとガラス壺をモチーフに。

ての問題が解決したような大満足を
覚えたりすることなど。

このように、名前を知っているこ
とで、ある程度のイメージを思い浮
かべることができますが、それはあ
くまで概念としてのイメージであり、
実際に見たり感じたりしたものでは
ないのです。

■見えること(ひんと)

また、以前にも書きましたが、私
たちの眼は、いつでもその時代の「見
え方」に洗脳されています。

例えば現代は、テレビや写真の氾
濫で、レンズを通したモノの見え方
に慣れてしまっています。そして、
写真があたかも絶対的な真実を映し
ているように感じていますが、それ
はあくまで、見え方の一つでしかあ
りません。

私たちの眼は、単純なレンズとフ
イルムだけで構成されているのでは
ありません。脳にはフィルムなどな
く、認識と記憶の回路があるだけで
す。したがって、人それぞれの見え
方は異なっているのが当然なのです。

見え方が人の数だけあるというこ

とは、真実も人の数だけあるのです。
それが一様に「写真のように」見え
るということは、見え方の概念が出
来上がっているからなのです。有名
な言葉に、「自然は芸術を模倣す
る。」というのがあります。これは、
優れた作品が「自然の見方」を提示
していて、その見方に洗脳されてし
まうことを言っているのです。その
後で見える自然は、その作られた概念
で見えてしまうのです。

■概念を取り払う

私がここで言う発見のヒントとは、
これらの概念を取り払うということ
なのです。概念が発見の邪魔をして
いるからなのです。

例えば「バラ」を描くことにしま
す。もちろん、私たちはバラを「知
って」います。しかし知っているの
はバラの概念であって、個体ではあ
りません。

もし、これが名も知らぬ花なら、
きつとじっくり観察するでしょう。
そして初めて「きれいな花には刺が
ある」などと感心したりするかも知
れません。そうしたら、花より刺の



(図4) モチーフ写真

方が気になって、「刺の絵」などを描いたりするかも知れないのです。

このように、それを初めて見る物のように新鮮な眼で観察してみると、今まで知らなかったことに気づいたり、全く異なる見え方や感じ方がしてきたりします。そこに新しい発見があるのです。

このような「発見」は、実は、日常のどんなシーンにでも転がっています。それに気がつくかどうかということなのです。

私たちは、思ってもいなかったり、これまでに経験したことがなかったりすることに遭遇した時、感動します。その意味で、このようにして描かれたものが、新しい見え方・感じ方であった時、作品は見る者に感動を与えることができるのです。

「芸術とは何か」という問題は、私には難しく答えられません。少なくとも、感動を与える作品が芸術の一部であることは確かなことではないでしょうか。

■ ガラスの静物を描く

今回は、ガラスの器を並べてみま

す。

私は、透過してくる光の美しさに惹かれ、ガラスの器を見ると、つい欲しくなって買ってしまいます。たびたび絵の中に登場していますが、今回は香水入れの小壺を新参者として手に入れたので、描きたくありません。

- しばらく混合技法から遠ざかっていましたので、途中からの読者の為に、もう一度おさらいしていきます。
- 1 F6号の MDF ボードを支持体に、カオリンとチタニウムの膠地をプレパレーションとして塗布します。
 - 2 デッサンしたものをトレースし、ボードに転写します(制作過程1)。
 - 3 その上から、墨でなぞります(制作過程2)。
 - 4 食い込み止め(アイソレーション)と、有色下地(インプリミトゥール)にするために、油メデイウムを加えた油絵具ライト・レッドを塗布します(制作過程3)。
 - 5 テンペラ白で浮き出させていきます(制作過程4・5)。

続きは次回に。

制作過程



(制作過程3)
 アインレーション(食い込み止め)と、インプリミトゥーラ(有色下地)。油絵具ライト・レッドにメデイウムとテレピンを加え、全体に塗布。油メデイウムⅡスタンド・リンシードⅠ、ダンマル樹脂溶液Ⅰ、ダンマルⅠ00gに対しテレピン400cc、テレピン2



(制作過程4)
 テンペラ白で浮き出し。始めは形を明確に出す為に、輪郭に沿って明部を起こす。テンペラメデイウムⅡ全卵2、ダンマル樹脂溶液(ダンマルⅠ00gに対しテレピン200cc)Ⅰ、水3



(制作過程5)
 背景部には、テンペラ白でマチエールの変化をつける。

(制作過程1)
 支持体MDFボード。膠70gを水1000ccで溶いた膠水に、カオリン3に対しチタニウムⅠの割合で、ひたひたまで振り入れたものを下地塗料とする。これを縦横交互に6度塗りしてフレレーションとする。乾燥後、#240のサンド・ペーパーで整える。その上からデッサンの転写。デッサンをトレッシング・ペーパーに写し、その裏に油絵具のライト・レッドを擦り込み、パネルの上からなせる。



(制作過程2)
 墨入れ、ライト・レッドの上から、墨または水彩黒でアンダー・ドロウイングをしていく。ある程度の陰影は、黒としての色彩効果にもなる。